



大会挨拶

新座母親大会はことしで40回の節目の大会を迎えることができました。地域の皆様、実行団体の皆様、いつもご参加くださっている皆様のあたたかいご支援によるものと心より感謝申し上げます。

さて母親大会は、1954年アメリカのビキニ水爆実験に反対し、平和を求める母親たちの核廃絶の思いから生まれた運動が実を結び、第1回日本母親大会が1955年東京で開催されました。その後各地で毎年欠かさず開催されています。

8年後の1963年8月、今の朝霞、志木、新座、和光の4つの地域を一つにした北足立南部地区母親大会は誕生しました。新座からも子どもの手を引き、背負い、バスを乗り継ぎ実行委員会に参加したと聞いております。その12年後1975年に新座母親大会が誕生しました。「国際婦人年」の年です。

暮らしを語り、平和を語り、人権を語り、平等を語り、自由を語り、それぞれの考えを互いに尊重しあい、平和憲法をよりどころにして学び行動してきました。毎年欠かさず開催してきました。

交通の便の良くない新座市のどの地域からも参加していただきたいと28回大会までは会場を公立の小中学校にしてきました。その後学校での開催ができなくなってからは、公民館で開催しています。その中で参加団体や、個人のそれぞれの運動の交流の場となり、学習の場ともなっています。それぞれの市民運動の成果や、40年の歩みをロビーに展示しました。合わせてご覧頂けたらと思います。

さて、ここで、日本母親大会が敗戦から第1回大会開催までどのような状況の中から生まれたのか、その10年について少し触れておきたいと思います。

母親運動30年史「母親が変われば社会が変わる」によれば、日本が降伏条件として受諾したポツダム宣言は、日本軍国主義の絶滅、日本国民の民主主義の強化、言論、宗教、基本的人権の確立を強く要求していたので、戦前からの女性解放への戦いにも大きく道を開きました。初めての選挙権行使ののち日本国憲法が制定され、これまで押さえつけられていた女性は、ようやく一人前の人間としての地位を獲得しました。そして憲法の平和的民主的条項を実質的ものとするために女性運動は大きく湧きあがり、新日本婦人同盟（後に婦人有権者同盟）などをはじめとして新しく女性団体が次つぎと生まれ、働く人々の間でも労働組合づくりが急速に始まりました。しかし、1949年に中華人民共和国が

誕生したのをきっかけに連合国側の占領政策が大きく変わりました。それと時を同じくして旧職業軍人 3250 人を含む 13340 人の戦犯が解除されて、日本は軍備を持たないと憲法に明記してあるにもかかわらず 75000 人の警察予備隊（後々の自衛隊）がつくられ、海上保安庁 8000 人の増員が決められていました。これは「ポツダム宣言」と「日本国憲法」両方に違反する再軍備にほかなりません。平和と民主主義を脅かすことが次つぎに起きましたが、女性たちはそのたびに憲法を盾にこの国の未来に責任を持つものとして自己主張し主体性を回復していく、そんな時代背景の中ビキニ環礁で起きた 3 度目の被ばくでした。度重なるアメリカの核開発実験に驚きと怒りそして再び戦争に巻き込まれるかもしれない不安。女性たちは核兵器廃絶へ行動を始めました。個々の女性団体が統一をめざし、世界の女性団体ともつながり、「世界母親大会」になり、「日本母親大会」の開催へと実を結ぶことになったと記されています。

今、安倍政権は 7 月の閣議決定で憲法 9 条を骨抜きにし、平和のための武力行使し、集団的自衛権を容認して日本を戦争しない国からいつでもどこでも戦争できる国に変えようと躍起になっています。

日本母親大会誕生前夜の日本の母親、女性たちが、いただいたであろう不安と恐怖を、今、私たちも同じように強く感じています。

なんとしても、平和で安心な世の中を子どもたち、若者たちに手渡さなければなりません、これは私たち先を、歩いているものの責任だと思います。そのためにもこの母親運動を、必ず次の世代に継承していきたいと考えています。

41 回からの新座母親大会開催へのご支援もあわせておねがいして大会あいさつとさせていただきます。

第 40 回新座母親大会実行委員会代表 宍戸 久子

